



日本植物分類学会

ニュースレター

No. 19

Nov. 2005

目次

奨励賞、論文賞および大会発表賞を新設します	2
新設の大会発表賞について	2
滞納者の除名について	3
会費納入のお願い	3
日本植物分類学会第5回大会および2006年度総会のご案内	4
国立大学などにおける学会会場費値上げ問題に関する情報提供のお願い ..	9
諸報告	10
庶務報告(2005年8~10月)	10
委員会委員の決定について	10
転載許可願への対応手続きについて	10
日本植物分類学会2005年度第2回評議員会議事録抄録	11
2005年度野外研修会実施報告	12
野外研修会に参加して	13
お知らせ	15
平成17年度 自然史学会連合講演会のご案内	15
第5回 日本分類学会連合シンポジウムのご案内	15
日本植物分類学会講演会のご案内	16
書評	18
ヘイウッド花の大百科事典	18
いきもの便り	20
プナンのサゴとり	20
チイ便り・4 ~地衣類の“食”~	21
会員消息	22

奨励賞、論文賞および大会発表賞を新設します

会長 邑田 仁

日本植物分類学会では会則第4条(4)に基づき日本植物分類学会賞を設けております。従来は毎年2名程度の方に授賞を行ってまいりましたが、昨年度に設けられた「学会賞検討委員会」により、奨励賞、論文賞およびポスター賞を新設すべきという答申をいただきました。これについて本年度2回の評議員会で検討していただいた結果、ポスター賞を口頭発表も対象に含めた大会発表賞に拡大し「奨励賞、論文賞、大会発表賞」の3つを新たに設けることが承認されました。これらを実施するためには、授賞に関する規約等を

新設あるいは修正し、さらに実施要項を作成することが必要ですが、こうした準備を次回3月の評議員会までにととのえ、規約を承認していただいて、来年度からすべての授賞を実施する予定です。会員の皆様には、今のうちから力のこもった研究発表・論文を準備して、大会でそれらを発表し、またAPGや分類に投稿していただけることを期待しております。次回大会の大会発表賞の詳細については、大会発表賞担当評議員の村上さんが、次に解説してくれています。該当者の方は、大会案内にあります応募要項をご覧の上、ぜひ応募(立候補)してください。

新設の大会発表賞について

大会発表賞担当評議員 村上哲明

本号のニュースレターに掲載されている評議員会議事録にもあるとおり、分類学会賞検討委員会からの答申を受けて、評議員会では大会発表賞(口頭発表賞とポスター発表賞)を新設する方針を決めました*。

まず、次の第5回沖縄大会から新設する予定の大会発表賞の基本コンセプトを述べさせていただきます。この賞は、パーマナント・ポストに就いていない若手研究者(学生、院生はもちろん、ポスドクや任期付き助手なども含みます。ただし、年齢制限は特に設けません。)で、優れた研究を行い、それを大会でうまく発表した人を顕彰することによって、大会を盛り上げ、植物分類学分野の若手を奨励することを目的にしています。このような賞を新設することによって、若手研究者の方々が日頃から、少しでもより良い研究をしよう、それを大会で少しでもよりうまく発表しようという意識を今まで以上に強くもっていただけたら幸いです。

受賞者の選定に当たっては、複数の審

査員によって、研究内容とプレゼンテーションのうまさ(ポスター賞の場合は、ポスターの視認性の高さ、わかりやすさなど)を、それぞれ約2:1の重みづけで採点させていただく予定です。ポスター賞については、ポスターのみを審査し、口頭による説明は審査対象とはしません。

審査対象者は、口頭発表賞、ポスター発表賞のいずれも、大会発表申し込み時に審査対象になることを自ら希望した筆頭発表者で、実際に口頭発表、ポスター発表をされる方本人に限ります。受賞者には、賞状を授与します。学会では副賞は準備しませんが、賞を取られたことは受賞者に様々な形でプラスに作用するはずで、有資格の方は、どうかふるって大会発表賞にご応募下さい。具体的な応募方法は、このニュースレターに掲載されている第5回沖縄大会の案内(pp. 4~8)をご覧ください。

なお、受賞者は、翌年の大会発表賞の審査員に加わっていただくことを予定しています。

* 会長が書かれておりますように、これを学会の正式の賞とするためには、総会で規約の改正をすることが必要になります。もし、来年の総会でそのように議決

されれば、第5回沖縄大会で募集するものが第1回の大会発表賞ということになります。否決された場合には、第5回沖縄大会だけの特別企画となります。

滞納者の除名について

会長 邑田 仁

学会の運営は皆様の会費を基に行われておりますが、会費を滞納される方が少なからずおられます。会費滞納がありますと、経済的な問題が生じるのはもちろんのこと、出版物の発送停止と解除、通常の連絡以外の督促状の発送など、事務的な負担も大きくなり、学会運営に支障をきたすこととなります。この問題は、今年3月の総会におきましても特に解決すべき課題としてあげられました。そこで4月には、全会員宛に「未納会費納入のお願い」を送付し、未納会費の解消にご協力を頂いた結果、多くの方から会費を納入して頂くことができました。誠に有り難うございました。

しかしながら、依然として滞納されて

いる方もおられます。この状況をふまえ、9月の第2回評議員会において、現在の日本植物分類学会が発足した2001年度からの長期滞納者については、会則第10条に基づき除名手続きを進めることが了承されました。該当する方へは、10月7日付けで督促状を差し上げておりますが、もし2006年2月末日までに未納会費の納入が無い場合、3月の大会時に開催される評議員会の議決を得て、除名とさせていただきます。

学会としましては、除名を発動することはきわめて残念なことでありますので、会費納入のうえ会員として継続されることを希望しております。何卒よろしくお願い申し上げます。

会費納入のお願い

会計幹事 田中法生

本学会の会費は前納制で、前年の12月末日までにお納め頂くことになっております。会員の皆様の会費納入状況はニュースレター本号の送付宛名の右下に「納済年度:〇〇」として示されております(自動振替をご利用の方は数字の代わりに「自動振替」と記入されています)。例えば、「2004」の方は2005、2006の2ヵ年分をお納めいただくこととなります。この数字が2006未満の方は、2005年12月末日までに同封の郵便振替用紙にて、該当

する金額を納入頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

本学会では自動振替をご利用頂けるようになっております。ご希望の方は、会計幹事までお知らせください。ただし、2006年度分の引き落とし手続きはすでに終了しておりますので、ご利用は2007年度分からになりますので、ご了承下さい。

その他、会費納入に関してご不明な点がございましたら、会計幹事(連絡先はニュースレター巻末)までお問い合わせください。

●年会費

一般会員5,000円、学生会員3,000円、
団体会員8,000円

●郵便振替口座

口座番号 00120-9-41247
加入者名 日本植物分類学会

日本植物分類学会第5回大会および 2006年度総会のご案内

日本植物分類学会第5回大会準備委員会

日本植物分類学会第5回大会を以下のように開催いたします。

【会場】

琉球大学大学会館(発表・総会・シンポジウム)

琉球大学生協中央食堂(懇親会)

八汐荘(評議員会)

※講演会場は椅子のみで机がありません。大会会場は、当初予定していた沖縄国際大学から、琉球大学に変更しましたので、ご注意ください。

【日程】

3月17日(金)

【16:00~19:00】 評議員会

3月18日(土)

【08:30~12:00】 一般講演(口頭発表賞の候補者)

【12:00~13:00】 総会

【13:00~15:00】 一般講演(口頭発表賞の候補者を優先)

【15:00~17:30】 ポスターセッション

【18:00~20:00】 懇親会

3月19日(日)

【08:30~12:00】 一般講演

【12:00~13:00】 昼休み

【13:00~14:30】 表彰式(大会発表賞・学会賞)・学会賞記念講演

【15:00~18:00】 公開シンポジウム

琉球列島の生物地理学研究-最近の話題と今後の展開-

(琉球大学21世紀COEプログラム「サンゴ礁島嶼系の生物多様性の総合解析」共催)

司会・世話人:横田昌嗣(琉球大・理・海洋自然)

1. 横田昌嗣(琉球大・理・海洋自然)

琉球列島の植物相の概要

2. 太田英利(琉球大・熱生研・西原)

琉球列島の歴史生物地理-動物学の視点から-

3. 荻沼一男(高知女子大・生活科学・環境理学)

南西諸島におけるハマボッスの染色体多型と地理分布

4. 傳田哲郎(琉球大・理・海洋自然)

琉球列島におけるニガナ属の網状進化

5. 瀬尾明弘(京都大・院・理・植物)

琉球列島に生育する複数の植物種の遺伝的分化の地理的パターンの比較

※公開シンポジウムのみのお聴講は、無料です。

3月20日(月)

【08:30~18:00】 エクスカーション

恩納村万座毛(沖縄県指定の天然記念物で採集はできません。オキナワスミレ、ハナコミカンボク、ヒメクロウメモドキ、オキナワマツバボタン、サクヤアカササゲ、ヒメスイカズラ、アサガオカラクサ、イソノギク等の自生地・基準産地として知られています。)、名護市嘉津宇岳(沖縄県指定の天然保護区域で採集はできません。タイワンミヤマトベラ、カツウダケカンアオイ、ヒナカンアオイ、オキナワウラジロイチゴ、リュウキュウホウライカズラ、オキナワテンナンショウ、カツウダケエビネ、アリサナムヨウラン等の自生地・基準産地として知られています。)、本部町国営沖縄記念公園(海洋博記念公園)を予定しています。参加費と

してバス代が約4000円(費用は参加者数により変動します。)、弁当代(ペットボトル飲料付き)が650円かかる予定です。参加者が15名を下回る場合は、開催を中止する場合があります。悪天候等により予定を変更する場合があります。なお、上記の植物の観察を確約するものではありません。嘉津宇岳は登山になりますので、山歩きができる服装と靴をご準備ください。3月下旬の沖縄の気温は、本土の5月下旬頃の気温に相当します。参加費は郵便振り込みでは送金せず、大会受付でお支払ください。参加申し込みは2月28日までをお願いします。日程と参加費(弁当代・飲み物代を含む)の詳細は、参加希望者に3月6日頃にお知らせします。

【発表の要領】

○一般講演

時間は、講演12分、質疑応答3分の計15分です。液晶プロジェクター、35mmスライド映写機およびOHPを用意いたします。発表・参加申込書に希望する発表媒体を記入してください。

・液晶プロジェクター:Windows XP とMacintosh(Mac OS X)のパソコンを用意いたします。Microsoft PowerPointでファイルを作成し、CDRまたはCDRWに焼き付けたものを、大会前の3月12日(月)までに大会準備委員会あてに郵送してください。送られたファイルは発表順にハードディスクにコピーし、動作確認をいたします。当日の操作は発表者自身で行っていただきます。卓上に用意したパソコンのマウスまたはカーソルキーで操作してください。Microsoft PowerPointは、Windows版ではver. 2000、Macintosh版ではv. Xを使用します。複雑なアニメーションなどは表示に時間がかかることがあるため、なるべく避けるようにご協力願います。当日のファイル受付はいたしません。念のためPowerPointファイルをOHPシートに出力してご持参ください。

・35mmスライド:スライド映写のための人員は配置しませんので、スライドホルダーへの装填および機器の操作は各自で手配して行っていただくこととなります。

○ポスター

ポスター発表用のパネルは横90cm、縦180cmを予定しています。左上角に講演番号を貼るための余白(10×10cm)を残してください。貼り付けには画鋸を用いて構いません(画鋸は大会準備委員会が準備します。)。3月18日の朝8時30分から掲示できます。3月18日午後の一般講演終了後にポスターセッションを行います。

【大会参加費(講演要旨代を含む)】

1月16日までに振込の場合	4,000円(一般)	2,000円(学生)
1月17日以降振込と当日申込の場合	5,000円(一般)	3,000円(学生)
要旨集のみの別売価格	1,000円	

【懇親会】

3月18日(土)18時から、琉球大学生協中央食堂(大学会館の隣)で行います。		
1月16日までに振込の場合	5,000円(一般)	4,000円(学生)
1月17日以降振込と当日申込の場合	6,000円(一般)	6,000円(学生)

【昼食】

3月18日(土)は、琉球大学生協中央食堂が利用できますが、19日(日)は学内の食堂は利用できません。大学周辺にはコンビニはありますが、食堂は多くはありません。

ご希望の方には弁当(650円、ペットボトル飲料付き)を用意します。発表・参加申込書に希望日を記入し、大会参加費・懇親会費とともに代金を振り込んでください(2月28日まで)。

【発表・参加申込方法】

できる限り電子メールで発表・参加申込をしていただくようお願いします。別紙の「発表・参加申込書」に従って必要事項を入力し、タイトルを「学会申込」としてyokota@eve.uryukyu.ac.jpあてに送信してください(添付書類にしないでください)。送信してから3日経っても(土日・祝日を除く)大会準備委員会から受信の返事がない場合は、タイトルを「学会申込再送信」とした上、同じメールを送信してください。電子メールを利用できない方は、別紙の「発表・参加申込書」に必要事項を記入の上、大会準備委員会あてに郵送またはファックスしてください。

【大会発表賞へのエントリー】

大会発表賞(口頭発表賞、ポスター発表賞)にエントリーされる方は、「発表・参加申込書」9.大会発表賞へのエントリーの項目で、(1)するを選択してください。メールで参加申し込みをする場合は、「大会発表賞にエントリーする」と明記してください。エントリーされた方の大会における実際の発表形式に応じて自動的に、口頭発表賞、ポスター発表賞、それぞれの候補者として割り振られます。なお、大会発表賞へのエントリー資格のある方は、パーマナント・ポストに就いていない若手研究者(ただし、年齢制限は特に設けません)で、筆頭発表者として実際に口頭、ポスター発表される方本人です。大会発表賞については、本ニュースレターp. 2を参照下さい。

【要旨】

本大会では指定の用紙を同封していません。作成例に従って、左右は2cm、上下は3cmの余白を取り、A4判の用紙1枚に文字サイズ12ポイント以上でタイプしてください。発表題目の左には発表番号を印刷するための余白(4cm)が必要です。発表題目、1行空白、発表者氏名(かっこ内に所属)、発表者氏名(英語)、1行空白、要旨本文の順に記入し、実際に発表する演者の右肩に「*」を入れてください。図や表を入れることは可能ですが、グレイスケール(ハーフトーン)原稿は印刷の際つぶれてしまうおそれがありますのでご注意ください。要旨はそのままB5サイズに縮小して印刷・製本いたします。原稿はプリントアウトしたものを第5回大会準備委員会あてに郵便でお送

A 4用紙



りいただくか、ワードまたは一太郎の文書ファイルを電子メールの添付書類として送ってください。電子メールの場合は、タイトルを「講演要旨」としてyokota@eve.uryukyu.ac.jpあてに送信してください。送信してから3日経っても(土日・祝日を除く)大会準備委員会から受信の返事がない場合は、お手数ですがタイトルを「講演要旨再送信」とした上、同じメールを送信してください。なお、印刷の都合で体裁を変更する場合がありますのでご了承ください。パソコンの機種に依存する特殊文字は、文字化けする可能性がありますので、使用はお控えください。講演要旨のファックスによる送付は受け付けません。

【申込の締め切り】

発表者のみ:

発表申込・大会参加費振込 1月16日必着(電子メール、郵便またはFAX)

発表要旨原稿提出 1月30日必着(郵便または電子メール)

発表用PowerPointファイル 3月12日必着(CDRまたはCDRWを郵送)

その他:

大会申し込み・懇親会申込・参加費振込 2月28日必着

※1月17日以降は金額が異なります。3月1日以降は振り込まずに当日受付で精算してください。

弁当予約・振込 2月28日必着

※当日受付はできません。

エクスカーション 2月28日必着

※参加費は郵便振替では送金せず、大会受付でお支払ください。

【要旨原稿の送付先】

〒903-0213沖縄県中頭郡西原町千原1

琉球大学理学部海洋自然科学科生物系

日本植物分類学会第5回大会準備委員会

TEL: 098-895-8544(横田昌嗣)

FAX: 098-895-8576(生物系事務室)

電子メール:yokota@eve.u-ryukyu.ac.jp

【参加費送金先】

口座名義: 日本植物分類学会第5回大会準備委員会

郵便振替口座番号: 01720-3-96504

※郵便局備え付けの振替用紙をご使用になり、必ず振り込み金額の内訳(氏名・大会参加費・懇親会費・弁当の希望日等)を通信欄に記入して下さい。

【宿泊施設】

宿泊に関しましては、特に斡旋はいたしません。大学周辺には宿泊施設はありません。那覇市周辺の宿泊施設をご利用ください。

【会場までのアクセス】

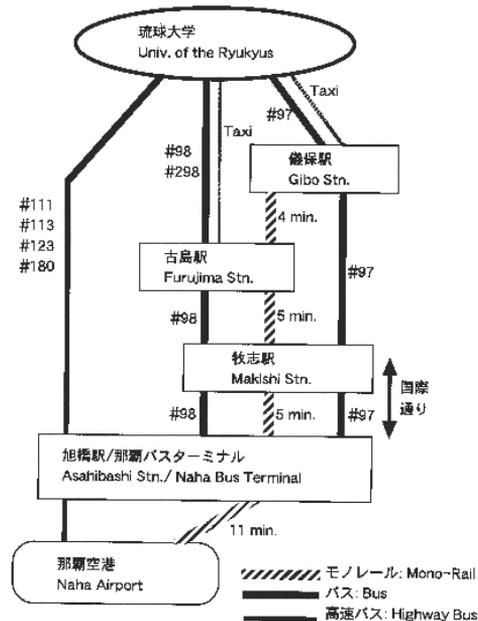
会場の琉球大学千原(せんばる)キャンパスへの交通については、琉球大学(http://www.uryukyu.ac.jp/access/access_index.html)、沖縄路線バス(<http://www.rosenbus.com/>)、ゆいレール(<http://www.yuirail.co.jp/>)のホームページもご参照ください。

○飛行機をご利用の方

路線バスをご利用の場合は、空港からバスを利用する方法と、モノレールとバスを併用する方法があります。沖縄ではタクシー料金が比較的安価なので、数名で利用すれば、タクシーでもバス料金とそれほど変わらない場合があります。

高速バスを利用する場合、空港からは111番・113番・123番(経由地:那覇空港→那覇バスターミナル→国場→農業試験場入口→幸地→琉大入口)、那覇バスターミナルからは180番(経由地:那覇バスターミナル→国場→首里駅→幸地→琉大入口)に乗り、高速道路を経由して、「琉大入口」で降ります。そこから徒歩で琉球大学北口まで3分、大会会場まで15分程度かかります。

モノレールと路線バスを併用する場合、沖縄都市モノレール(ゆいレール)で、「旭橋」、「県庁前」または「儀保(ぎぼ)」で下車します。これらに隣接して那覇バスターミナル(旭橋)またはバス停がありますので、路線バスに乗り換えます。琉球大学(北口)行きのバスは、97番(那覇バス)と98番・298番(沖縄バス)があります。97番(経由地:那覇バスターミナル→牧志→山川→儀保→西原入口→棚原→琉大病院前→琉大東口→長田→琉大北口)では「琉大東口」で、98番(経由地:那覇バスターミナル→牧志→おもろまち→古島→バイパス→広栄→真栄原→沖縄国際大学前→長田→琉大北口)と298番(経由地:交通広場(那覇市天久)→おもろまち→古島→バイパス→広栄→真栄原→沖縄国際大学前→長田→琉大北口)では「琉大北口」で下車します。バス停から大会会場まで徒歩で、北口バス停からは12分、東口バス停からは6分程度かかります。空港からのモノレールの所要時間は、旭橋は10分、県庁前は12分、儀保は25分です。バスの所要時間は交通事情にもよりますが(朝夕の通勤時間帯は著しく混み合うことがあります)が、那覇バスターミナル(旭橋)から約40~50分、儀保から約25分です。



○自家用車をご利用の方

共通教育棟または理学部前の駐車場をご利用ください。7:00~22:00の間は北口(宜野湾(ぎのわん)市側)・東口(中城(なかぐすく)村側)・南口(西原町側)のすべての通用門を開けるようにしますが、それ以外の時間帯は北口をご利用ください。迷惑駐車とならないようご配慮をお願いします。

【大会に関する問い合わせおよび連絡先】

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1
 琉球大学理学部海洋自然科学科生物系
 TEL: 098-895-8544 (横田昌嗣)
 FAX: 098-895-8576 (生物系事務室)
 電子メール: yokota@eve.u-ryukyu.ac.jp

【その他】

学会期間中も琉球大学理学部植物標本室 (RYU) の標本閲覧は可能ですが、必ず事前に問い合わせてください。

国立大学などにおける学会会場費値上げ問題に関する 情報提供のお願い

庶務幹事 黒沢高秀

法人化などに伴い、国立大学などで学会を開催する際に支払う会場使用料が高騰し、学会会場の確保に苦慮をするような例をあちこちで耳にするようになりました。これは、学会等の学術集会の使用料と、資格試験などの使用料を同一の基準で算出する影響等によるもので、このままでは、資金が豊かな学会以外にこれらの大学で学会を開催することが困難になる恐れがあります。実際に、本学会でも会場費の問題からある国立大学を会場にすることができなかったという事例も生じています。この件は先の評議員会でも話題となりました。本学会の加盟する自然史学会連合では、加盟学協会の意見を聞きながら、文部科学大臣及び政府関連部署に対し改善

要望書を出すことを検討しています。先の評議員会での議論を受けて、本学会では改善要望書を出すことに賛成するとともに、積極的に情報を提供してゆくことにしました。会員の皆さんのうち、このような事例をご存知な方は、自然史学会連合に情報提供することが可能な範囲で、(1) 学会や集会名、(2) 大学名、(3) 期間、(4) 会場数と会場の広さ、などの情報を庶務幹事宛 (下記) にお寄せ下さい。

〒960-1296 福島市金谷川1

福島大学共生システム理工学類内

日本植物分類学会事務局

(庶務幹事 黒沢高秀)

TEL 024-548-8201 FAX 024-548-3181

e-mail kurosawa@sss.fukushima-u.ac.jp

編集後のつぶやき

新設された大会発表賞への制限は、パーマナントポストに就いていないことというのみで、年齢制限なし！いいですねー。笹川にしる、科研の若手にしる、年齢制限にひっかかってくるようになると、あー、自分も歳をとったんだな〜としみじみ思い知らされますからねえ。さて、今月の「いきもの便り」では、富山の植物学会場でつかまえた小泉さんに、ゲスト連絡員として執筆をお願いしています。期せずして、チイの大村さんも食の話題。やはり「食欲の秋」というところでしょうか。今号には11月20日に開催される自然史学会連合講演会の案内が出ています。NLが20日より前に皆さんのお手元に届くよう努力したのですが、もし過ぎてしまっていたらすみません！

編集人・三島

諸報告

庶務報告 (2005年8～10月)

庶務幹事 黒沢高秀

・日本学術会議に「日本学術会議協力学術研究団体申込書」を会長名で送付した(10月28日)。日本植物分類学会は日本学術会議登録学術研究団体となっていました

が、日本学術学会の改革に伴い、登録学術研究団体制度が廃止されました。これに替わって設けられた「日本学術会議協力学術研究団体」になるための申し込みを行いました。

委員会委員の決定について

庶務幹事 黒沢高秀

今期の植物データベース専門委員会委員が決まりましたので報告いたします。

植物データベース専門委員会:

伊藤元己(委員長)、梶田 忠、高橋英樹、永益英敏、三島美佐子、山口富美夫

転載許可願への対応手続きについて

庶務幹事 黒沢高秀

『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』(植物分類地理学会時代の一部の論文を除く)および『分類』の掲載論文は著者より当学会へ著作権の委譲が行われています。学会誌掲載内容の商業目的でない転載許可(例えばホームページへの図の掲載など)について、2001年9月評議員会での決定にもとづき会長、担当評議員(今市涼子氏)、編集委員長、庶務幹事で協議した結果、今期は以下のような手続きで対応することになりました。

転載を希望する場合は著者(共著論文に関しては第1著者またはcorresponding author)の許可を得た上で、転載許可願を庶務幹事宛にお送りください。

「転載許可願」は、掲載物名、掲載時期、掲載場所(アドレス)、掲載の目的、著者から許可を得たことが明記された任意の書式で、書類上の宛名は学会長宛としてください。会長、担当評議員、編集委員長、

庶務幹事は提出された「転載許可願」にもとづき転載許可を与えるかどうか判断し、会長名で許可の書類を発送します。

なお、著作権法で著作権が制限されている、個人使用のためや図書館、教育機関における複製(授業のプリントなど)、引用(報道、批評、研究その他の引用の目的)の上正当な範囲で行われるものは許可申請が不要です。また、一般には公開されない商業目的でない出版物や電子媒体など(例えば学会発表のポスターや、アクセスが大学内に制限されているホームページなど)への転載の場合も、許可申請が不要です(2005年度第1回評議員会および第4回大会総会で決定。ニュースレター No. 17を参照)。商業目的の掲載内容の転載許可は学術著作権協議会(アメリカ合衆国以外における転載)または Copyright Clearance Center, Inc. (アメリカ合衆国における転載)に申請することになっています。

日本植物分類学会2005年度第2回評議員会議事録抄録

庶務幹事 黒沢高秀

会場：富山大学人文・社会系共通教育棟
講義室

日時：2005年9月23日 11:30～13:30

参加者

評議員：()内は被委任者 評議員出席8, 委任状出席1

出席(8名)：今市涼子, 梶田忠,
高橋英樹, 高宮正之, 出口博則,
西田佐知子, 藤井伸二, 村上哲明

欠席(4名)：秋山弘之(議長に委任),
植田邦彦, 小菅桂子, 綿野泰行

幹事会等：()内は役職

出席(8名)：邑田仁(会長), 黒沢高秀(庶務), 田中法生(会計), 鈴木武(図書), 三島美佐子(ニュースレター担当), 西田治文(自然史学会連合担当), 秋山忍(和文誌編集), 矢原徹一(絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会), 伊藤元己(植物データベース専門委員会), 加藤雅啓(学会賞等検討委員会)

欠席(5名)：岡田博(編集委員長), 菅原敬(植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当), 加藤英寿(ホームページ担当), 田村実(講演会担当), 柏谷博之(絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会)

1. 評議員会開催にあたり、邑田会長から挨拶があった。
2. 黒沢庶務幹事により、定足数が確認された。評議員出席8, 委任状出席1で本評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として西田佐知子氏が選出された。
4. 議事録署名人として今市涼子氏と梶田忠氏が選出された。

5. 報告事項

- 5.1 学術著作権協会との「文献提供者(DS)による限定的電子化許諾に関する代理委任契約」について
- 5.2 転載許可願いへの対応手続きについて
- 5.3 その他報告事項
 - ・2005年度講演会の進捗状況
 - ・植物分類学関連学会連絡会報告
 - ・2005年度野外研修会報告
 - ・第5回大会の準備状況
 - ・ニュースレター11号原稿
 - ・委員会委員の決定について

6. 審議事項

6.1 分類学会賞について

邑田会長より奨励賞, 論文賞, および大会発表賞(口頭発表賞, ポスター賞)を新設することが提案され, 了承された。奨励賞については植物学会の奨励賞等と重複の可能性を考慮に入れた上で新設することとなった。

次いで各賞の内容について審議された。論文賞の内容等については, 英文誌と和文誌のどちらの掲載論文も授賞対象にすることが確認された。大会発表賞については連続受賞を妨げる何らかの工夫を行うこととなった。奨励賞の内容等について審議が行われ, 対象年令を何歳にするか, および選考の開始を今年度にするか来年度にするかについて意見が出された。

今回の評議員会の議論をもとに奨励賞は学会賞選考委員会, 論文賞は編集長, 大会発表賞は村上評議員を中心に実現に向けて具体的な準備を進めることとなった。また, 細則と規定に関して幹事会で細部を詰めた上で, 次回評議員会に提案することとなった。

6.2 会費滞納者の除名について

邑田会長より督促およびその後の納入状況、現在の長期滞納者の状況について説明があり、田中会計幹事より2001年度からの滞納者については2004年度から出版物の発送を停止していることが説明された。除名者は公表が必要であるとの意見が出され、除名時にニュースレター上で氏名を公表することとなった。会費長期滞納者の情報提供や連絡・督促を幹事会、評議員、委員長で手分けして行うこと、督促状の送付を何度も行うことなど手を尽くした上で、2001年以前からの滞納者について除名の手続きを進めることが了承された。なお、最終的な決定は次回評議員会において、除名予定者

リストを承認することによって行われる。

6.3 その他

- ・情報学研究所とのAPGなどの情報提供の協定について

鈴木図書幹事より別紙資料をもとに説明があった。学会員かどうかを判別する方法が確立していないことや他学会の対応状況などが説明された。審議の結果、NII電子図書館に移行すること、APGと『分類』ともに出版後2年を経たものは無料で公開すること、ただし会員には2年以内のものも無料で見られるようにすること、機関ユーザーの年間定額利用を認めることが承認された。

2005年度野外研修会実施報告

邑田 仁・水野瑞夫

2005年度野外研修会「岐阜県徳山ダム周辺と伊吹山の植物」はニュースレター17号でのお知らせのとおり、以下のように行いました。台風11号が接近しており、天候がたいへん心配されましたが予定通り決行しました。

第1日めは邑田がミャンマー植物調査の現状についてパワーポイントを用いて概略を説明しました。夕食会（鮎料理でした）の和室にスクリーンを設営し、植物写真多数のため、食事中も自動映写で写真を流した後、食事に引き続いて講演を行いました。

第2日めはマイクロバスで移動し、途中で完成間近の徳山ダムを見学し、冠山の峠に駐車して頂上を目指しました。しかし、その頃から雨となったうえ、前年の台風で福井県側からの交通が遮断されていて、福井県の担当という登山道の整備が悪く、背丈ほどの濡れたササをかき分けて進むという悪条件となったため、時間までに到達



することができず引き返しました。霧で見通しも悪かったのですがブナとミズキ、クロモジがよく稔っていました。赤い実を付けたヤマシグレが多数あり、葉や果実の形に変異が大きくて、ひょっとしたらオオカメノキと交雑しているかとわくわくするほどでした。ツルリンドウ、クロヅル、リョウブなども咲いていました。夕方は話題豊富な懇親会となり、伊吹の薬草酒なども楽しみました。

第3日めは宿の前で記念撮影を行い、旧春日村のさざれ石公園に立ち寄った後、笹又（ここまでバス利用）から伊吹山に登

山しました。伊吹山は天候が悪いと風が強く、特に山頂付近は危険であるため立ち入り禁止となるということで、大変憂慮される状況でした。しかも当日は台風が東海〜関東に上陸予定で、前日の天候から見ても絶望的と思われたのですが、ほとんど雨も降らず、むしろ好天に恵まれたといえましょう。山裾の畑に薬草として栽培されているカワミドリが見事に咲いている(ラベンダーよりきれい。他にも野菜や薬草類多数あり)間を通り抜けて登っていくと、タケニグサ、ウド(栽培か?)ヤブヅルアズキ、マメダオシ、ガガイモ、ジャコウソウ、フシグロセンノウ、オニドコロ、イガホウズキ、ハガクレツリフネ、ハナウド、カエデドコロなど(順不同、邑田の撮影順です)が見られました。木本ではウリノキ、ウリハダカエデ、シロモジ、マユミなどが若い実をよく付けていました。マユミの大木は日光湯本以来久しぶりに見て感激しました。かなり登ってバス道路に近くなってから、マネキグサ、レイジンソウが出現し、そこから石灰岩のガレ場に出てイブキコゴメグサ?

クルマユリ、ウメバチソウ、イブキアザミ?、トリカブトの仲間、ヒメフウロ、シシウドなどを見ました。もうこれで十分という感じでしたが、さらにバスで駐車場まで登り、頂上付近のお花畑まですっかり観察することができました。ルリトラノオ、オオヒナノウスツボ、トモエソウ、イブキシモツケ、テンニンソウ、ミツバベンケイ、ワレモコウ、アキノキリンソウ、サラシナショウマ、タムラソウ、その他不勉強のため名前を記すことのできない多数のセリ科やアザミの仲間が咲き乱れていました。山の裏側にはめったに見られないという琵琶湖まで顔を出すというおまけつきでした。頂上からバスで関ヶ原駅に到着、解散しました。

終わりよければ全てよしと言って許されるならば、今回の研修会も大成功だったと自己評価しています。例によって植物を話題に話しが弾み、大いに刺激になりました。皆様ご協力ありがとうございました。



左から、イブキコゴメグサ、ルリトラノオ、イブキシモツケ。前ページも含め撮影は全て邑田 仁。

野外研修会に参加して

中村肇

8月23日(火)から8月25日(木)にかけて、2005年度の植物分類学会野外研修会が行われました。私が野外研修会に参

加するのは昨年に続いて今回が二度目になりますが、私のように植物の知識が乏しい者がフィールドに出て植物を観察しながら諸先生方のお話を伺える掛け替えのない機会であるため早々に申し込みを

済ませ、ハンディーGPS端末とカメラを片手に参加しました。今年の野外研修会は台風11号の接近と重なってしまったため雲行きの怪しい状態が終始続きましたが、幸運にも時折雨に振られる程度で済み観察への支障もあまり無く3日間を終えることが出来ました。

8月23日

今回の宿泊場所である揖斐川丘苑への集合時間は18時となっていたのですが、参加者の多くが早くから来て宿泊場所の近くで採集。初日は夕食に鮎料理を頂き、邑田先生のミャンマーの植物スライドショーを楽しみ1日を終えました。

8月24日

9時に揖斐川丘苑をマイクロバスで出発。徳山ダムにて見学をした後、国道417号線を經由して11時半頃に冠山峠にてマイクロバスを降りて時折小雨の振る中、山頂を目指して尾根筋を登りました。私は邑田先生および黒沢先生の3人と共に先頭を歩いていましたが、時間の都合のため山頂を断念し途中(35. 46. 58. 07N, 136. 24. 21. 87E, alt. ca. 1110m)で引き返

すことになりました。山頂まで行けなかったものの、様々な植物を観察し勉強することができ貴重な体験をすることが出来ました。冠山峠にて再びマイクロバスに乗り、徳山ダムを經由して揖斐川丘苑に戻りました。懇親会の席で揖斐川丘苑の女将さんの趣味が押し花と知り、押し花器を披露して頂きました。

8月25日

8時に揖斐川丘苑にて記念撮影を撮りマイクロバスにて出発。さざれ石公園にて自生する薬草やシダなどを観察しました後、笹又登山口から山頂まで夏の伊吹山に咲く花々を観察しました。伊吹山での観察を終え、マイクロバスにて関ヶ原駅へと向かい14時半頃に駅にて解散となりました。

最後に、今回の野外研修会に於いて現地での手配をして下さった上に「伊吹山の薬草」「揖斐川上流動植物ハンドブック」などの貴重な資料を下さった水野瑞夫先生、徳山ダムでの観察に便宜を図っていただいた独立行政法人水資源機構および徳山ダム関係者にお礼を申し上げます。



左:伊吹山にて。 右:宿の前で記念撮影。 撮影:邑田 仁。

ニュースレターへの寄稿・情報提供、大歓迎！
苑先・問い合わせは下記まで。

三島美佐子

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1九州大学総合研究博物館

電話: 092-642-4298 FAX: 092-642-4299

メールアドレス: mishima@museum.kyushu-u.ac.jp

お知らせ

平成17年度 自然史学会連合講演会のご案内

「科学への入口“自然史”-第一線の専門家が語る10のとびら-」

【主催】 自然史学会連合

【共催】 大阪市立自然史博物館・西日本自然史博物館ネットワーク

【日時】 2005年11月20日(日)10:30～16:30

【場所】 大阪市立自然史博物館(大阪市東住吉区長居公園1-23)

【交通機関】 地下鉄御堂筋線 長居駅、JR阪和線 長居駅より徒歩8分

【プログラム】

10:30 開会 連合代表挨拶(鎮西清高)

10:40～ 講演第1部

「クモには意外と敵がいる?クモヒメバチの寄生習性」 松本吏樹郎(大阪市自然史博)

「干潟のカニが見せる巧妙な社会行動」 和田恵次(奈良女子大)

「絶海の孤島に生き残った小さなフクロウ、ダイトウコノハズクの生態」

高木昌興(大阪市大)

11:50～ 昼食(60分)

12:50～ 講演第2部

「花の模様は虫を導くためにあるって、本当?」

岡本素治(大阪市自然史博)・香取郁夫(近畿大)

「いわゆる「腐生植物」はどのように生活しているのか?」

大和政英(環境総合テクノス・生物環境研究所)

「アンモナイトの遺骸は浮くか沈むか?-化石化の原点を探る」 前田晴良(京大理学)

14:10～ 講演第3部

「ポリネシア人は巨人である」 片山一道(京大理学)

「外来生物をめぐる誤解と葛藤:理解と対策を妨げるもの」

中井克樹(滋賀県立琵琶湖博)

「今世紀、大阪平野は激しく揺れるか?」 寒川 旭(産業技術総合研究所)

15:30～ 総括講演「ぼくの考える自然史研究の意義」 日高敏隆(総合地球環境研)

第5回 日本分類学会連合シンポジウムのご案内

【場所】 国立科学博物館分館講堂

【日時】 2006年1月7日(土)13:30～17:30

「ミドリムシは動物?それとも植物?:原生生物の不思議な世界」

2006年1月8日(日)10:00～13:00

日本におけるドイツ年記念シンポジウム

「日独学術交流史-相模湾動物相調査の歴史 と成果」

日本植物分類学会講演会のご案内

田村 実(大阪市立大学大学院理学研究科)

日本植物分類学会講演会は次の通り開催する予定です。

【日時】

2006年1月14日(土) 午前10時10分～午後4時40分

【講演会場】

大阪市立大学文化交流センター
大阪市北区梅田1-2-2-600 大阪駅前第2ビル6階
電話:06-6344-5425

【プログラム】

- 10:10～11:10 藤井 伸二(人間環境大学・環境保全)
絶滅危惧植物の落とし穴:水田と草地の植物を例に
- 11:20～12:20 工藤 洋(神戸大学・理学部・生物)
タネツケバナの謎に迫る
- 12:20～13:20 昼食
- 13:20～14:20 西田佐知子(名古屋大学・博物館)
未知の葉上器官「ダニ室」
- 14:30～15:30 加藤 雅啓(国立科学博物館・植物研究部)
カワゴケソウ科の分類と進化
- 15:40～16:40 邑田 仁(東京大学・大学院理学系研究科・附属植物園)
ミャンマーの植物をたずねて(スライド講演)

【昼食】

講演会場での食事はできません。会場周辺に食堂がたくさんございます。

【講演要旨(執筆は各演者)】

「絶滅危惧植物の落とし穴:

水田と草地の植物を例に」

藤井 伸二(人間環境大学・環境保全)

近年は、水田や里草地の植物が絶滅危惧種として注目を浴びるようになっている。しかし、水田や里草地といった環境は人間によって二次的に創り出されたものである。二次的自然環境に依存する絶滅危惧種の実像を考えてみたい。

「タネツケバナの謎に迫る」

工藤 洋(神戸大学・理学部・生物)

タネツケバナは水田に普通に見られるアブラナ科の雑草である。ところが、生育する環境によって著しく形態が変化する。また、タネツケバナ属には多くの種が含まれ、識別形質は少ないのに変異が大きい。「どれがタネツケバナか分からない」というのがタネツケバナの謎なのだ。

「未知の葉上器官『ダニ室』」

西田佐知子(名古屋大学・博物館)

ダニ室は葉の裏に植物が作る部屋で、ダニとの共生のための器官とされている。しかしその役割はまだよくわかっていない。様々な形が見られるダニ室について、その形態や生態を紹介し、その役割について考えてみたい。

「カワゴケソウ科の分類と進化」

加藤 雅啓(国立科学博物館・植物研究部)

*Mourera*属が1775年に南米から記載されて以来、日本では1927年に今村駿一郎が川内川の支流でカワゴケソウを発見して以来、内外の植物学者によって注目を集め続けてきたこの植物の分類と進化について最近の研究を踏まえて紹介する。

「ミャンマーの植物をたずねて」

(スライド 講演)

邑田 仁(東京大学・附属植物園)

ミャンマーはインド・ヒマラヤ地域、中国、マレーシア地域の植物相が接する地域であり、それらの関係を議論するうえで重要な地域であるにもかかわらず、標本情報が地球上で最も貧弱な地域として知られる。演者らは最近6年間にわたってミャンマーの植物多様性を調査してきたが、手始めとしてポパ山国立公園について全維管束植物を対象とする調査報告を発表する予定である。また調査時に多数の植物写真を撮影しているので、これらをホームページ公開することを計画している。この講演では、現地調査の様子と特徴的な植物をスライドを用いて紹介する。



講演会会場への案内地図

書評

ヘイウッド花の大百科事典 大澤雅彦(監訳)

2005年4月発行 朝倉書店 3万6千円(税別)

原著はV. H. Heywood 編集の「FLOWERING PLANTS OF THE WORLD」。初出は1978年で、1993年にアップデートエディションが出版されている。分布図とカラー図解入りで世界中の植物の科を網羅したコンパクトな1冊の普及書としてはこれに匹敵するものはない。簡潔かつ要点を得た記述で、送粉様式や分類群の類縁関係にも触れており、読み物としても十分に楽しめる。英語圏では植物の研究者に限らずアマチュアを含めた幅広い読者層の支持を受けてロングセラーを続けているという。今回、待望の和訳本が出版されたことはたいへん嬉しい思いがする。

学生時代に図書館で本書を手にとって「なんて便利な本があるんだろう」と感動した記憶がある。職を得てから自分で本書を購入した際には「えっ、ハードカバーでオールカラーページなのに7千円台!」という衝撃の体験をした。内容の濃さと低価格のアンバランスに強い印象を覚えたのだった。ただし、訳書の値段は3万6千円(税別)。普及書としてはあまりに高価だが、クビツキ編「維管束植物の科と属」(洋書)のような専門書の値段を考えると我慢するべきなのか。あるいは和書で全科を扱った「週刊朝日百科植物の世界」を持っている場合は、あえて購入しないという選択肢もあるだろう。しかし、以下の私の文章を読んでいただき、一人でも多くの方がこの本を(原書でいいから)自分のものにされることを願わずにはいられない。

本書の内容については、一人の読者(利用者)としてただただ有り難い一言である。すべての科の世界でのおおよその分布図が掲載されており、どの地域に分布しているかが一目で理解できる。日本に分布し



ていて植物自体をよく知っている場合でも、そのグループの世界的な分布についてはなかなか思い至らないことが多い。ヤマモガシ科、ホルトノキ科、ニガキ科などは日本が世界での北限域だし、アワブキ科の東南アジアと中南米の隔離分布やヤマトグサ科の地中海と東アジアの隔離分布など、分布図を眺めるだけでも興味は尽きず、しかも自分なりの発見に満ちている。各種の図鑑類にも分布の記述はあるのでこうした発見は私自身の不勉強に起因するのだが、文字情報ではなく「分布図」として表現されていることのすばらしさに感動してしまう。

本書のもう一つの特徴は、「分類」に関する記述である。科内のシステムだけでなく、近縁科についての言及が簡潔に記述されている。重要な形質についても付記されていることが多く、分類群の独立性や類縁性を考えるときの根拠がある程度理解できる。ところで、図鑑等に記述された分類群の関係(科同士の類縁やどの属がどの科に含まれるかということなど)にはかなり暫定的なものが含まれていて研究の進展によって次々に修正されていくものだが、恥ずかしいことに原書を読んだ頃にはそんな

ことへの認識がなく、類縁関係の記述にはかなりのカルチャーショックを受けた記憶がある。最近の分子系統学の進歩はめざましくて必ずしも本書の分類システムすべてが今に通用するわけではないが、系統関係を見直す研究背景や新しい結果を理解する素養としてたいへん有益だと思う。

本書のページをめくっていると自分自身の不勉強さに気づかされることがあまりにも多いが、一方で「科」という分類ランクを通した植物の多様性を考えるきっかけにもなる。例えば、被子植物の中でシンクンシ科とフトモモ科の一部だけが持つ特殊な単細胞毛の記述がある。調べてみると「combretaceous hairs」という名称の与えられた奇妙な構造のものだった。また、シナノキ科はアオイ科に近縁だが、葯室の数が前者は2、後者は1の点で異なると記されている。こういう判別形質は図鑑をきちんと読めばいいのだが、科の記載文を隅々まで読み比べるのは相当な集中力を要するので、「分類」の項目に最重要点を簡潔にとりあげる本書の書式はありがたい。また、クロウメモドキ科の記述ではブドウ科との類縁性が記され、「ブドウ科の花弁がより大きく、花床と果実の特徴がわずかに異なり、葉が決して単葉ではなく浅裂もしくは複葉であるという違いしかない」とある。そう言われてみれば、両科の本質的な違いをうまく答えられない不勉強な自分に気づいてしまう。ゴマノハグサ目の各科の「分類」の記述もたいへん興味深く、すべての科を通読すると花冠、雄蕊、子房、胎座などの進化傾向をある程度読みとることができてわくわくする。その意味で、本書は図鑑や辞書の域を超えて、読み物としての内容を持っている。原書では多数の科の記述を一度に比較しながら読むことがつらかったのだが、訳書だと英語の苦手な私もこうした興奮を存分に味わうことができる。

重箱の隅をつつくようで訳者には申し訳ないのだが、ふと気がついたことを述べておきたい。原書ではクロウメモドキ科の花弁の特徴について「There are <中略> four or five small, incurved petals that are often closed over the four or five stamens」との記述があるが、訳書では「4または5枚の小さな内曲する花弁があり、この花弁は4または5本の雄蕊の上でしばしば閉じている」となっている。「closed over」の訳であるが、「上で・・・閉じている」ではなく、「覆い隠す」とすべきであろう。このことはクロウメモドキ科の図3aを見ると理解できる。ちなみに平凡社刊の日本の野生植物の当該科の記載には、「雄蕊は花弁と<中略>対生して花弁に抱かれている」とあり、「抱かれる」という言葉によって花弁の奇妙な特徴を表現している。ところで、花弁と雄蕊が対生というのも重要な形質だが、本書にはその記述の見あたらないのが残念だ。しかし、図には花弁と雄蕊の対生という事実は明瞭に示されている。記載文の内容を図版によって理解を深めてもらうという配慮は、国内で出版されている各種の図鑑類や週刊朝日百科植物の世界には欠けている。

私は子供の頃に植物の科名を原色図鑑から書き写して丸暗記(科の意味もわからずに文字通りの丸暗記である)しようとしたことがあるのだが、科の分布図、科レベルの類縁関係、科の特徴を表した図版などが1冊に揃っている本書が当時に和訳されていなかったことがとても悔しい。本書の和訳本が、日本の植物研究を目指す若者をはじめアマチュア層の座右の一冊になることを願うばかりだ。もちろん、多数の美しい図版はそれぞれの科の雰囲気や特徴を把握することができ、他分野の方にもお薦めと思う。それにしても3万6千円はちょっと高過ぎる。(藤井伸二)

いきもの便り

プナンのサゴとり

小泉 都(京都大学)

ボルネオにはプナンという狩猟採集民がいる。民族植物学を研究している私は彼らからたくさんのかんことを教えてもらったけれど、今回はやはりサゴヤシの話をしてしようと思う。サゴヤシはボルネオの狩猟採集民の主食を供給してきた。サゴヤシとしてはマイナーだが、*Arenga undulatifolia* Becc. のデンプンは苦味がなく調査地のプナンに好まれている。今では定住して稲作を行うプナンだが、次の収穫までに村中の米が尽きてしまうこともよくある。ラタン籠やら鉦やらを作って売っては米を買ってくるが、いつも十分な米を用意できるわけではない。

やっぱりそんな去年の12月、キーインフォーマントのおじさんの家族とともに*A. undulatifolia* のデンプン採りに出かけた。一枚の布とビニールシート以外は、全て自分たちで作った道具とその場で森から採ったもので作業が行われた。サゴの切り出しと小川のそばまでの運搬、サゴ濾し台づくり。髓の繊維をこそいで、そこからデンプンを濾しとる。写真のサゴ濾し台は、小柄な奥さんが材料の切り出しから組



み立てまで全て一人で用意したものだ。村では子どもっぽい話ばかりして調査の邪魔をすることもしばしばの息子たちも、根気よく鋏状の道具を使って繊維をこそ

いでいった。森を歩く速さと植物を覚えることだけは、プナンからも褒められていい気になっている私だが、その技術と体力を見ているとやっぱりとてもかなわないと思う。

その夜は2種類のサゴ料理を作ってくれた。まずは、お湯で溶いたトロトロのサゴ。ちょうどわらびもちを冷やし固める前の状態だけど、もう少し風味がある。これをキノコ(残念ながら種名は分からない)と*A. undulatifolia* の新芽の炒め煮をおかずに食べた。そのキノコは味も歯ごたえも申し分なく、ヤシの新芽はくせがなくとてもおいしい。もうひとつは、たっぷりの油で分厚く焼いたもの。日本で食べておいしいと思えるかどうか分からないが、なにしろおやつに乏しい生活。油のジューシーさがたまらない。この夜は作らなかったが他にもサゴ料理はいろいろあってそれがプナンの自慢なのだが、とくにイノシシと組合すと他ではちょっと味わえない素敵な料理ができる。

写真を撮っただけの私だけれど、そのサゴの分け前をもらえた。しっかり乾燥させて日本まで持って帰ってきた。食べてしまうのがもったいなくて、今でもちょっと残してある。



左: 根気よく働く息子たち。右: 手製のサゴ濾し台で、デンプンを濾しとる様子。

チイ便り・4 ～地衣類の“食”～

大村嘉人(国立環境研究所)

ある日、カナダの見知らぬ方から一通のメールが届いた。彼は民族植物学を専攻している大学院生で、British Columbiaの原住民によって食べられている*Bryoria fremontii*(地衣類ハリガネキノリの仲間 (Fig. 1参照))について調べているとのことであった。

本種は飢饉のときにのみ食べられたと紹介されることもあるが、一方でこれを好んで食べている地方もある。調理法は、玉ネギや青ヒナユリ、ザイフリボクの実、その他の調味料などを加えて、黒いゼラチン状の塊になるまで土の穴で蒸し焼き(pit-cooking)にして、それに砂糖やレーズン、リンゴをのせて焼いたり、スープにしたり、プディングを作ったりするそうである(Brodo et al. 2001)。

さて、どうして彼が私にメールを送ってきたかという、少し前に地衣類研究会会報に書いた『食べられる地衣類は?』という記事(大村2003; <http://home.hiroshima-u.ac.jp/lichen/trend/edible.htm>)を見つけて、「これは面白いから追加情報があったら教えて欲しい」ということが理由であった。内容は日本語で書かれたものだったが、知り合いに英語に訳してもらって読んだとのことであった。よほど「地衣類の食文化」に関心があったのだろう。

日本で地衣類が食用にされていることは、世界中の地衣類研究者の間でよく知られており、必ずと言っていいほど教科書に「iwatake」が登場する。岩茸(*Umbilicaria esculenta*)は高山の露岩上に生育している種であり、きれいに洗浄しアクを抜いた後、三杯酢に漬けたり天ぷらにしたりして調理する。特別な味があるというわけではないが、キクラゲのような食感であり、なかなかの珍味である。

イワタケの場合には毒のある地衣類と見間違えることはまずないと思われるのだが、*B. fremontii*ではよく似た形態で強い毒性を示す種がある。原住民は、手触りや色の組合せ、

味などを確かめることによって、それらから*B. fremontii*を区別するそうである。さらに、彼らの調理法は地衣体を消化しやすいように柔らかくするだけでなく、毒を取り除く効果もあるかもしれないと大学院生は述べていた。

『食べられる地衣類は?』には、文献情報や私の体験から“食”に関連した約20種の日本産地衣類について、食用・お茶・煙草・香辛料・毒のある種をリストアップして紹介している。キノコと同様に地衣類にも毒を持つ種があるということを常に意識しなければならないのだが、食用可能な種と同じ属で同じ地衣成分の種は、おそらく食べられるのではないかと思う。

「それにしても、そこまでして地衣類をわざわざ食べなくても良いのでは?」と思われる方もいらっしゃるだろう。しかし、British Columbiaの原住民だけでなく多くの分類学者の先人達がそうであったように、彼らは五感を研ぎ澄まして植物を知り、身をもって鋭く“種”を区別していった。私もそのように地衣類と向き合うことによって“一味”違った種の見方が出来るようになればと思っていると

引用文献

- Brodo, I. M., Sharnoff, S. D. & Sharnoff, S. 2001. Lichens of North America. Yale University Press.
大村嘉人. 2003. 食べられる地衣類は? ライケン 13(3): 6-9.



Fig. 1. ハリガネキノリ(*Bryoria americana*) (富士山にて撮影)。日本には*B. fremontii*は分布していない。ハリガネキノリにはフマルプロトセトラール酸が含まれるために苦みがあるが、毒性はない。

この号に同封されている振り込み用紙は、
年会費の振込専用です。沖縄大会の参加費
の振り込み用紙ではございませんので、ご
注意ください。

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読
申込などは下記へご連絡ください。

〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

国立科学博物館筑波実験植物園

日本植物分類学会 田中法生(会計幹事)

Phone: 029-853-8433

Fax: 029-853-8998

E-mail: ntanaka@kahaku.go.jp

会費: 一般会員5,000 円、学生会員3,000 円、

団体会員8,000 円

郵便振替 00120-9-41247

名 義 日本植物分類学会

平成17(2005)年11月 7日印刷

平成17(2005)年11月15日発行

編集兼 福岡市東区箱崎6-10-1

発行人 九州大学総合研究博物館

三島美佐子

発行所 福島市金谷川1

福島大学共生システム理工学類内

日本植物分類学会